

学生主体型授業の開発を通じたFD

杉原 真晃

(山形大学基盤教育院)

問題意識

「高等教育の質保証」という言葉はもはや、目新しい言葉ではなくなった。大学は教育機関としての役割を実質的に果たすべく、いわゆる「学校化」(田中, 2003)を迫られるようになった。その背景には、①進学率の上昇による高等教育の大衆化による学生の質の変化への対応、②産業構造の変化、グローバリゼーション、情報化社会、知識基盤型社会、社会人の再教育等への対応、③不況による高等教育への期待、教育機関としての説明責任等への対応が挙げられよう。

しかし、このような改変が求められる一方で、教育機関としての大学は、早急な対応が困難な組織ともいえる。それは、大学が、消費者ニーズへの柔軟・迅速な対応を目指す企業組織と構造的に異なる故であろう。そのような中で変化が求められる大学という組織は、多くの矛盾や課題を抱えながら試行錯誤を繰り返しつつあるといえるであろう。

また、これまで大学には、初等・中等教育のような近代学校システムが整備されておらず、学校システムの構築と再構築(時には脱却)を同時に、しかも早急に進めていく必要性に迫られている。それにより、大学には、かなりの疲弊、あるいは外部モデルへの無批判な依存が発生しているともいえるであろう。

そういった状況において、我々は、旧態依然のような教育に回帰するわけにはいかず、一方、企業や近代学校的工場モデルの論理への追従に身を委ねて安心するわけにもいかない。そこに必要なのは、これらの外部モデルの有用性と限界を明らかにすることであり、各大学の文脈に即した、より教育改善のモデルを開発しつつ、外部モデルの再構築を行うことである。

研究の目的

本研究は、このような問題意識のもとで、より有用な大学教育改善の在り方を検討するために、授業開発およびファカルティ・ディベロップメント(FD)に焦点を当てた実践研究に位置づけられる。そのうち、本発表は、今日、新たに求められる能力である「社会人基礎力」を育成する教育実践の在り方と、それを通じたファカルティ・ディベロップメント(FD)の在り方についての成果と課題について考察するものである。

研究の対象

本発表における研究の対象は、「文部科学省 平成 20 年度 質の高い大学教育推進プログラム」に採択された、山形大学の「学生主体型授業開発共有化 FD プロジェクト」の取組の 1 つである、学生主体型パイロット授業「未来学へのアプローチ」である。

本プロジェクトは、年度毎に、「第 1 期：調査・研究段階」、「第 2 期：パイロット授業の開発・共有化段階」、「第 3 期：全学実施段階」と展開していく。現在、第 2 期であるが、

第3期において、パイロット授業でのノウハウを活かして、他の教員が自身の授業の実情に応じて学生主体型授業を展開し、全学的に学生の社会人基礎力（本プロジェクトでは、「積極性、コミュニケーション力、課題発見・解決能力等」と定義）の向上を目指すことが計画されている。

パイロット授業「未来学へのアプローチ」は、建築学が専門の教員、教育学が専門の教員、そして化学が専門である教員によるリレー式の授業である。この3名の教員がそれぞれ、「未来の持続可能都市を探る」、「格差問題をふまえて未来を創る」、「環境問題を考える」というテーマのもと、「グループ学習（調査・討論）→発表→全体討論→相互評価」を基本とした学習活動を行うものである。グループ学習にあたっては、授業時間外学習を義務化し、学習の質の向上を目指している。

本発表は、本授業における、次の2点について焦点を当てる。①「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」での学生主体型パイロット授業における学生の社会人基礎力の育成成果、②学生主体型授業の開発・共有化に向けたFDの成果。

結果

①については、学期末に実施した受講生対象のアンケート調査の結果（回答者数23名）から、「この授業で良かったと思うことは何ですか？（複数選択可）」という質問に対する回答に、「発表の準備が良い訓練になった」（17名）、「口頭発表などプレゼンテーションの仕方が身についた」（17名）、「クラスやグループの友人の考え方がよく解った」（17名）等が多く見られた（酒井ら, 2009）。また、同アンケートで、本授業を受講して向上した能力を尋ねた質問の中で「積極性・主体性」に関しては、「とても向上した」（11名）、「少し向上した」（10名）、「普通」（1名）、「無記入」（1名）、「コミュニケーション力」に関しては、「とても向上した」（10名）、「少し向上した」（12名）、「無記入」（1名）、「問題発見能力」に関しては、「とても向上した」（7名）、「少し向上した」（11名）、「普通」（4名）、「無記入」（1名）という回答があり、社会人基礎力の育成に関する成果が見られた。

②については、専門分野の異なる3名のリレー式授業における幾度もの打ち合わせ、互いの授業方法と学生の学習の様子との接触、学生を交えた授業検討会の実施等により、かなりの相互研鑽が進められた。そして、これらの知を学内で共有するために、常時、授業を公開し、授業検討会を開催している。さらに、山形大学のFD「教養教育ワークショップ」において、これらの取組を発表し、本ワークショップに参加した学内外の先生方とともに議論を重ね、学生主体型授業の開発をFDに活かすことができた。

発表当日は、これらの成果、そして課題について、さらに詳細に報告し、会場の方々と知を共有するとともに、意見交換を通してさらなる研鑽を行いたいと考えている。

参考文献

酒井俊典、杉原真晃、栗山恭直、佐藤慎也、小田隆治「学生主体型授業の創造－授業改善から授業開発のFDへ－」『第59回東北・北海道地区一般教育研究会 研究集録』2009年（印刷中）。

田中每実「大学教育学とは何か」京都大学高等教育研究開発推進センター編『大学教育学』培風館、2003年、1-20頁。